

おにぎりころころ 広島

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。ふたりは、貧乏でしたが、たいそうな働き者でした。

ある日、おじいさんは、山へしばを刈りに行きました。お昼になったので、木の根っこにこしを下ろして、たったひとつしかないおにぎりを出して、食べようと思いました。すると、おにぎりは、ころころ転がって行って、穴の中に落ちてしまいました。

おじいさんは、もったいないと思って、おにぎりを追いかけて、穴の中に入って行きました。どんどん奥へ入って行くと、お地蔵さんが立っていました。お地蔵さんは、おじいさんのおにぎりを食べていました。おじいさんは、

「もしもし、お地蔵さん。わしはひどい貧乏で、昼めしは、そのおにぎりひとつしかありません。それを食べないと、腹がへって仕事できません。どうか返してください」といいました。お地蔵さんは、

「そうか、それは悪かった。じゃが、今ここへ鬼が来るから、わしのおしりの下に入ってくれておれ。わしが、おしりを三べんふつたら、コケコッコーと、にわたりの鳴くまねをせえ」といいました。

おじいさんは、恐くてたまらなかったので、すぐにお地蔵さんのおしりの下にはいきました。

まもなく、鬼がいつぴきやって来て、お地蔵さんに、大声でいいました。

「地蔵、人臭い。地蔵、人臭い」

お地蔵さんは、

「人間なんか、おりはせん」といいましたが、鬼は、

「いや、人間がおる」といいます。

おじいさんが、恐くてぶるぶる震えていると、お地蔵さんが、おしりを三べんふりました。おじいさんは、コケコッコーとにわたりの鳴きまねをしました。するとお地蔵さんが、鬼に、

「そらそら、極楽鳥が鳴いたよ。もう夜が明けたから、帰れ帰れ」といいました。

鬼は、後も見ずに、あわててかけて帰りました。

おじいさんは、「やれやれ」といいながら、お地蔵さんのおしりの下から出て来ました。

お地蔵さんは、鬼がわすれて行った金棒を、おじいさんにくれて、

「この金棒は、ほしいと思ってふると、なんでも出る金棒じゃ。これを持って帰れ」といいました。

おじいさんは、鬼の金棒をもって帰り、お米がほしいと思いつながら金棒をふると、お米がどつきり出しました。お金がほしいと思つてふると、お金が山ほど出しました。おじいさんとおばあさんは、たちまち大金持ちになりました。

さて、となりのおじいさんがそれを見て、自分もひとつ金棒をもらって大金持ちになりたいと思いました。そこで、おにぎりをこしらえて山に行きました。けれども、おに

ぎりはちつとも転がりません。おじいさんは、腹を立てて、おにぎりを投げつけました。すると、おにぎりは、ころころ転がって、穴に落ちました。おじいさんは、しめたと思つて穴に入つて行きました。どんどん奥へ入つて行くと、お地蔵さんが、おにぎりを食べていました。となりのおじいさんは、なさけなそうな声で、

「もしもし、お地蔵さん。わしはひどい貧乏で、昼めしは、そのおにぎりひとつしかありません。それを食べないと、腹がへって仕事できません。どうか返してください」といいました。お地蔵さんは、

「そうか、それは悪かった。じゃが、今ここへ鬼がくるから、わしのおしりの下に入つてかくれておれ。わしが、おしりを三べんふつたら、コケコッコーと、にわたりの鳴くまねをせえ」といいました。

となりのおじいさんが、教えられたとおりにお地蔵さんのおしりの下にはいこむと、まもなく、鬼がやって来て、

「地蔵、人臭い。地蔵、人臭い」といいました。お地蔵さんは、

「人間なんか、おりはせん」といつて、おしりを三べんふりました。となりのおじいさんは、おかしくて、くすくす笑ってしまいました。おには、

「それ見い。人間がおつたろう。きのうは、ようもだましたな」といつて、お地蔵さんをつきのけて、おじいさんを金棒につきさして、地獄へ連れて行きましたとさ。

原話…『安芸国昔話集』磯貝勇著

再話…村上郁